

近年、湿地環境が生物多様性の宝庫として関心を持たれるようになってきた。しかし、湿地の生物に対する研究の多くは植物群落の遷移や水鳥の生態など水辺環境に関するものが中心で、水生生物についての研究は立ち遅れている。北海道東部太平洋岸に位置する別寒辺牛湿原は人為的な改修が少ない原始の湿地生態系が維持された場所として知られている。また、厚岸湖・別寒辺牛湿原は、ラムサール条約登録湿地として、水鳥の繁殖地あるいは渡りの中継地として全国的に注目されている。しかしながら、別寒辺牛湿原に生息する水生生物に関する知見は少ない。このため、主要な水生生物である魚類に関する基礎調査を行った。

1997年の7月から11月にかけて、厚岸湖に流れ込む大小3河川水系（別寒辺牛川・尾幌川・トキタイ川）で淡水魚類相と流域分布を調査した。本調査では、8科15種を確認した。そして、厚岸・別寒辺牛湿原の淡水魚類相は、近隣の釧路湿原と同じく、海と川を一生のうちに行き来する魚種たちで特徴づけられた。つまり、サケ科の魚類であるアメマスがほぼ調査域全域で多数確認されたほか、イトウやサクラマス（ヤマメ）も採集された。そして、本調査地域で4種2型のトゲウオ科の魚種が側所的に共存しているという事実は、本地域が生物進化と分散過程といった問題を考える上での重要な研究の場であることを示唆している。また、別寒辺牛湿原がいつ頃成立したのかという問題は、ヤチウグイとフクドジョウという海を介した移動のできない魚種の侵入時期を推定することによって明らかにできるであろう。

今後は、魚類とそれ以外の生物間の相互関係といったテーマでの研究を進めることが必要であり、また、湿地生態系と生物多様性に関する総合的な研究の場として厚岸・別寒辺牛湿原は重要な価値を持つものと考えられる。